

## 第十三回 夢と誇りを架ける若戸大橋



若松と戸畑を結ぶ若戸大橋

### 建設契機は 若戸渡船の大惨事

洞海湾をまたいで戸畑区―若松区間約四百メートルを結ぶ全長2・068キロ、海面より橋げたまでの高さ約42メートルのつり橋「若戸大橋」。1962年9月開通当時「東洋一」を誇ったその姿は、地元市民の誇りであり若松、戸畑の象徴でもある。同時に、その陰に苦難の歴史をも抱えていたことを知る人は少なくなっている。

86年前の1930年（昭和5）4月2日、若松のえびす祭帰りの客を満載した若松から戸畑に向かう渡船「第一わかと丸」が、洞海湾の中ほどで汽船からの横波を受けた。定員をはるかに超えた乗客で傾き浸水していた船内はさらに浸水が増して転覆、死者73人を出す大惨事となった。その際、必死に縋りつく者の手を振り払って水中から脱出という苦い体験をし、後生苦しんだ人もいた。遭難者は若松

水上署前に運ばれたが、困惑するだけの若い医師に、近くの芳野三郎医師が「裾をはぐれ。恥ずかしそうに手を動かした人は助かる見込みがあるから、すぐ手当を」と指示していた。（子息の芳野敏幸氏の著書より）

この惨事を契機に「戸畑、若松両岸を結ぶトンネルか橋の建設を」という声が高まり、1936年、県議会で隧道計画が決議され2年後、国が認可した。しかし日中戦争勃発

で中止。第二次大戦後、トンネル、架橋の可能性を調査して1953年、若松、戸畑両市による架橋促進期成会が発足、国を動かして1959年4月、着工にこぎつけて3年後、橋が開通した。

### 惨事、事故を 乗り越えて

しかし、この架橋工事中、事故などで作業員ら10人が殉職した。橋の若松側主塔近くに慰霊碑が立つ。「百千の船を見守りながら 十の御魂が眠っている（中略）展げゆく 未来の象徴 世紀の橋に賭けた尊い生命の歌は 清らかな



歩行者の利便を図って今も活躍する若戸渡船

こだまとなって 永遠に鳴り響く」の碑文が哀しい。

それらを乗り越えて橋は今、市の発展、市民生活に不可欠のものになっている。若松中央校区まちづくり協議会長の吉永勝好さん（74）は「遠方に行つての帰り、赤いその姿を見ると帰郷したという実感がわく。ふるさとの象徴です」と言う。北九州市の「劇団青春座」は5月、若戸大橋を題材にした劇を上演する。初めての試みで、代表の井生定巳さん（75）は「遭難者の救助に当たった人、牧師で若松市長として架橋に全霊を打ち込んだ吉田敬太郎氏ら、架橋の背後にこんな人たちが、ドラマがあつたことを知ってもらいたい」と話している。

シニアスタッフ 村田和夫